



みや た あき こ
宮田 明子

生年月 1987年11月兵庫県生まれ
最終学歴 2010年関西大学 工学部
建築学科修了
業務経歴 2010年鹿島建設(株)入社
●担当した主なプロジェクト
2010年 (仮称)大崎駅西口C地区開
発計画建設工事
2011年～15年 日比谷三井ビルディ
ング解体工事
2015年～18年 (仮称)新日比谷プロ
ジェクト新築工事
2018年 東京建築支店 建築工事業
理部総合プロダクトグループ
2018年～20年 (仮称)OH-1計画新築
工事
2020年 関西支店 建築部建築工事業
理グループ

■青年技術者のことば

入社してからの約十年間、東京の大規模現場で女性現場監督として実際に物づくりの最前線で働いてきたが、2年前、社内の定期異動にて大阪の地に赴任した。それまでの現場業務とは大きく異なり、社内の管理部門、現場の支援部署での勤務となった。自分の身を置く建設業を、現場（現業部門）と内勤（管理部門）の両面から考え、自らが実践してきた建設技術者としての軌跡を見直し今後の働き方に活かすこととした。そして、今後も現場業務のイメージが強い建設業において、女性建設技術者の魅力・働き甲斐を伝え、長く働くことが出来る選択肢を導くことに繋げていきたい。

■すいせん者

矢野和孝
鹿島建設(株) 関西支店 建築部
建築工事業理グループ長

一流の建設技術者を目指して
～現場経験を活かした管理部門での建物づくり～

●現場（現業部門）

入社して着任したのは、総工事費約300億の現場であった。工事金額の大小にかかわらず標準的な建物の建設であれば工種の数は同じだが、大規模であるが故、屋上工事とエントランス階の内装工事担当という限られた範囲での施工管理だった。この頃は、朝が何より重要という先輩社員の言葉を胸に、朝早く現場に出て当日の作業エリアを巡回してから朝礼に参加することが日課だった。その他にもずれ違う全ての人に必ず挨拶をする、コミュニケーションを大切にする、建設現場というものに馴染む、これらが目標になっていたように思う。
入社2年目から9年目まで配属されたのは商業施設とオフィスからなる複合施設の解体から新築で、総工事費は1,000億を超える規模の現場であった。主に鉄骨工事を担当し、地上35階建の超高層ビル建設を経験した。ここでは担当業務をこなすことで精一杯となり、他工種や担当外の工事エリアに踏み込む余裕がなく、気付いた時には現場が大きく変貌を遂げていた。事前の計画やチェックに掛ける時間をもっと多く取っていただければ、不具合や手戻りが減らせたのではないと思う。根本的な現場監督の業務を理解できていなかったのではないかとも思える。
その後は、事務所ビルの内装工事を担当した。ここでは、図面に表現されていない納まりを詳細に検討することや、施工計画の重要性を学んだ。また、同時に後輩の指導を任されるようになり、指導・教育の仕方や、上手くやりがいを持たせて仕事をさせる難しさを痛感した。



写真1 外観全景

●内勤（管理部門）

－現場支援・施工計画－

関西では管理部門へと配属となった。ここでは、稼働現場への技術支援や社内行事の調整などを行うのが主な業務となる。現場で身に付けたコミュニケーション能力を内勤でも率先して活かした。社内とは言い異なる部署では仕事上の接点が少ないため、現場に置き換えると担当外の工種と言える。複数の現場に対し、同時に支援を行う部署であるため、検討会や技術支援などで現場を訪ねた際は工事全体を俯瞰して見るよう心掛けている。ピンポイントでの検討も大切にしながら、現場から一歩離れることで気付くことがあると考えている。必ず行っていることは、仮囲い周辺が第三者に配慮した設えになっているかの確認である。歩行者の誘導や飛散防止対策など、現場の仮設計画の点検である。そのかいがあってか、これまで指導した現場では、トラブルを聞いていない。現場の特性に応じた注意ポイントを現地一品生産である建設業の特性を活かし、現地で造るからこそ出来るモノ造りの過程を地域の人々と感じ合えるものにしたと考えている。
建築部材の納まりは、経験と共に知見や引き出しが増えていくが、現部署ではほぼ毎日どこかの工事に関する検討会が実施されており、ここで得られる知見を、必要としている現場に水平展開することが今の私の置かれた立場に求められている。精度確保が難しい形状の型枠に対し、開発初期の製品を採用した実績と共に他現場へ水平展開し、品質向上や工期短縮に貢献することも行ってきた。

●内勤（管理部門）

－現場支援・環境管理－

近年、建設業では環境に対する取り組みが今まで以上に重要視されている。アスベストや汚染土壌に関する環境技術は、その代表的なものである。関連法令の度重なる改正などもあり、行政や自治体の動向を把握することが重要で常に最新の情報を反映した取り組みが必要となる。
私は環境担当者という立場も担っており、管内の稼働中現場からアスベストと汚染土壌を取り扱う工事を常に把握し、諸官庁手続きや工事対応をフォローしている。アスベスト対応では現場によって施工条件が異なるため、具体的な作業計画が法律に遵守しているかを審査している。また、過去のトラブル事例をもとに現場で注意するポイントを指導し、必要に応じて現地立会確認を実施している。私が環境分野を担当してから今日まで、大きな環境ト

ラブルなく環境管理が出来ている。土壌汚染対策に関しては、工事着工前に検討を始めることが必要であり、施主との共通認識を持つことがとても重要である。費用と工期にも影響がありプロジェクト自体の存続にも大きく関わるため、設計や営業との連携も大切にしている。
私が初期の計画に関わることで、アスベストや土壌汚染対策に初めて関わる工事担当の良き相談相手となり、現場の細かい疑問などをサポートしながら一緒に施工管理をしている。作業開始前に注意ポイントを関係者に共通認識として持たせたり、リスクの抽出とそのフォローを行ったりすることで、オフェンス型の環境管理を行っている。

●まとめ
－今後の展望－

建設業の最前線で働く女性として、人生のライフプランを大切にすることは重要である。建設業に入職する若手が年々減少しているなか、女性の新卒採用者が労働人口減少の歯止めの一つになることは間違いない。そのためには、女性が長く働けるモデルケースが複数必要である。今回紹介させていただいた現業部門と管理部門のパイプ役や建設技術の先導役は、企業にとって重要な役割である。今後結婚・出産・育休後に働き続けることを不安に思っている女性建設技術者に対し、働き方の選択肢を増やすことが出来たと思う。

数多くある建築の知見を選択しながら集約させ、一つの成果物となる建物を造る現場（現業部門）と異なり、有益な情報を必要なタイミングで提供し、複数の現場へ展開させる内勤（管理部門）は、個々のスキルアップを通じて建設業の発展に貢献する場である。ICT技術の活用を通じて労働時間を見つめなおすことが叫ばれる昨今、とても重要な働き方のモデルとなると思う。

